



滝野隆浩の

# 掃苔記

## 渋谷で今年も「死」を思う

「死」について皆で明るく考えるイベント「Deathフェス」が今年も11日から6日間、東京・渋谷の「渋谷ヒカリエ」で開催される。3回目の今年はずますます内容が充実してきた印象がある。

「死をもっとポップに、終活を再定義する」が正式なテーマ。共同代表の女性2人が「(遺体を微生物で分解する葬法の)堆肥葬なほまっていいよね」「アメリカの一部の州で合法化されてるし」などと盛り上がったのがきっかけ。毎年4月14日を「よい死の日」と定め、2024年から開始。昨年は4000人超の来場者があり、国内外のメディアが「いまの日本人の死生観を知る機会」などと伝えた。

3回目の今回は新企画が目白押し。名もなき人たちが詩でもダンスでも何でもありで「死」を表現し合う「Death1グランプリ」を初開催。伝統仏教を呼び込んで設定した「仏教デー」(15日)では、若い僧侶たちがフアッションショーにも挑む。過去2回の貴重な講演録を中心に情報発信する新雑誌「414!」の創刊も発表された。

講演(一部を除き無料)は充実している。「知の巨人の公開討論会」(13日)と銘打って東京大名誉教授の2人、「心の哲学」の信原幸弘氏と「死生観」の島蘭進氏が脳、意識、宗教などの領域を超えて対談。末期がん患者の在宅緩和ケアの日々を追った映画「ハッピー☆エンド」の上映会と主治医の萬田緑平氏のトーク(14日)も。そのほか「AIと死」「介護と死」「まちづくりと死」など各分野の実践者と研究者が語り合う。

さらにワークショップ、イベントスペースでは▽自分の最期のVR(仮想現実)体験▽毎回人気の「入棺体験」に加え、2人で入る「夫婦棺」▽性別も世代も超えて生と死を本音で語り合うスナック——などもある。

先端技術の体験ができるし、みどり現場の思いも共有できる。アートもあれば、ビジネスもある。学際的な研究成果が聞ける一方、感性に訴えるイベントも用意されている。参加希望者は本イベントのホームページ(<https://deathfes.jp/>)から申し込みを。当日申し込みもできる。(客員編集委員)